

あなたを

# 「生藍染め」をやってみよう。

米教協 オ33 国全国大会  
13の市 秋田大会  
お楽しみ広場 86. 8. 1

## 再び

昨年の「風山大会」において、私たち、ひめと理料カーウル（地下莖舎）は、はじめてのお楽しみ広場への参加として、「タマネギの皮でシャツを染める」「フジの葉で……」等々の草木染めを出しました。そのとき、本藍染めの研究者 正木国枝（山崎町在住…あの山崎断層で有名なところですよ）さんからいただいた。藍の種を育て、その葉をもっていき、「生藍染めに挑戦」をやってみたのですが、そのときあまりうまく行きませんでした。

あとで、わかったのですが、これには、少しムリがあったようです。それは、染める布に問題があったようです。木綿を牛乳にひたし乾かしたのを使ったのですがダメだったようです。ここには、「藍の歴史」があるようです。つまり、「藍」の青は、もともとは「庶民の色」ではなかったのです。絹にしが、きまらぬいものだったのです。王侯貴族や将軍、大僧正の身辺を飾った色だったのです。「庶民の色」になったのは、木綿がやってくるまで、そして、加工（発酵）させた藍 = 「蒨（まくも）をつくる技術が、発明されてからのことなんです。

このことがわかり、さっそく、絹、毛糸で「藍の生葉染め」をやってみました。みごとに、緑のジュースにつけた布は、ひきあげるとゴバルト、ブルーになるのです。この感動、感動を多くの人のそのにしたいと考え、再び、ここにもって来ました。

## 播磨の国から

藍というと「阿波の藍」といわれるくらい阿波の国（徳島県）の藍は有名ですが、私たちの住む播磨の国（姫路）も、昔はそれにきけな（ぐら）い藍づくりは盛んだったようです。もちろん藍染めも、本家本元は、むしろ播磨の国のようです。豊臣秀吉の時代に、播磨の国から、阿波

